

内山の古木

匠 探訪

163

豊和地区内山に古木があると言き、見に行きました。竹林に囲まれた屋敷の奥の小高い場所があり、周囲から見るのが難しい状態にあるのが惜しまれます。

屋敷の所有者によると、この古木は「榿やまびら」の木で樹齢数百年以上と言いい、由来などは分からないものの、根元に屋敷神がまつられ、代々大切にされてきたのでしょう。

目測では高さ20m超、根回り数m、枝振りは周囲の竹にさえぎられ分か

りませんが、根元から見上げると大樹の印象を受けます。

この木を見て頭に浮かんだのが「古代の丸木舟」です。

縄文時代の湖沼群が残る栗山川中流域や市内中央地区米倉から須賀地区にかけての水田の中から丸木舟が出土していて、榿を材料としたものも含まれます。木の太さから古代人も自分の丸太をくりぬいて造ったものか、と想像が膨らみます。

内山の古木に關し、もう一つ思い出されるのが「杉の大木」です。

文芸評論家・小説家の故・臼井吉見氏が、戦時中、内山の妙典寺を宿営地に生活した体験を1952(昭和27)年6月『伐木隊長手記』に記しました。

その中に、内山の家を囲むように先祖代々の霊が宿っているような木を切り倒す瞬間、70歳ぐらいの老主人が「両手で顔を掩い、体を震わせながら異様な呻きを発した」様子が出てきます。

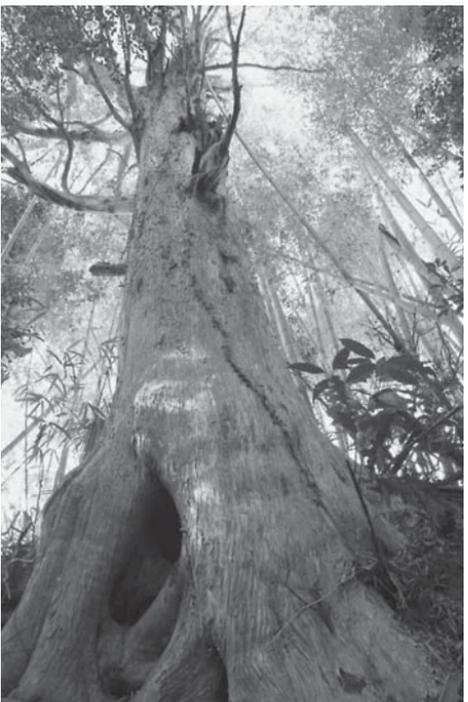
このことを知ってから40年ほどの間に、臼井氏が妙典寺を再訪したこと、寄宿した兵隊のこと、声を詰まらせ泣いた山の所有者のことなどを聞き取ることができました。

内山集落で杉の大木を目にすると、このことがいつも思い出されます。

(市文化財審議会委員・依知川雅一)

問 秘書課広報広聴

班 ☎ 73・0080



豊和地区(内山)の古木